

パナマ運河を開いた話

鈴木三重吉

パナマの運河といへば、だれにもおわかりのとほり、南北アメリカのまん中の、一とうせまい、約五十マイルの地峽をきりひらいて、どんな大きな軍艦でもとほれるやうにこしらへたほり、わりです。これは今から十五年まへに出来上つたのですが、最初アメリカ合衆国政府が、パナマ共和国に同意させて、あのほりわりをひらく計画をたてたのは五十年もまへのことで、かねてスエズの運河を作り上げた、ドウ・ルツセといふフランス人の技師をやとつて着手させたのでした。

ルツセははじめ千名の工夫をつかつて工事にかゝり  
ましたが、もと／＼この地方一たいは、マラリアだの  
くわうしよくねつ黄色熱だのといふおそろしい熱病のはやるところで、  
その千人の工夫も、黄色熱にかゝつて一年足らずの間  
に全部死んでしまひ、つぎに補充した千名も一年たゝ  
ないうちにまたすつかり死んでしまひました。百人の  
うち六十九人が一どにわづらつて、ころりと死ぬこと  
があるのですからたまりません。ルツセはどう／＼五  
万人近くの工夫を殺し、五億円以上の経費を使つたあ  
げくに、手も足も出なくなつてなげ出してしまひまし  
た。

これらの病気は、すべて熱帯地方には、ひろくはやつてゐたもので、そのもとは、あとでお話するやうに、蚊が病菌を人間へうつしたるからなのですが、五十年前にはこのことがまだ発見されなかつたので、多くの人々が方々でむだ死じにをしたのです。

そのころ西インド諸島のスペイン領では、駐屯軍ちゆうとんぐんの間に黄色熱がひろがつて、二三个月の間に百分中の六十八九人が死んだゝめ、司令官が狂人きちがひになつたといふ例もあり、ブラジルでは、同じ病気で一年に三万五千人がたふれ、その多くが船乗りだつたため、港にかゝつてゐるいくつもの汽船の動かし手がなくなつて、そ

の船がみんな立ちぐされになつたといふ实例もありま  
す。千九百四年にはインドだけでもマラリアで百万人  
もの死人を出しました。

中でもパナマ地方は、雨の多いところなので、沼や  
流れが多い上に、大木の森林がひろがりつゞいてをり、  
草なども、おそろしくのびしげるのもつて、いたる  
ところにくさり水がたまるので、蚊のゐることゝ言つ  
たら、たいへんなものでした。そんなわけですから、  
運河の大西洋口の起点の近くにあるコロンといふ町に  
ついて言つても、そのころ人口一万ぐらゐだつたその  
町に、墓の数が十五万もあつたのですからおどろきま

す。或<sup>ある</sup>ときパナマに駐在してゐるフランスの領事が、ルツセの部下の機械技師に服を買つてとゞけてやり、あすそれを着て午餐会<sup>ごせんくわい</sup>に出てお出<sup>い</sup>でとつたへたところ、技師はその日の中に黄色熱<sup>うち</sup>にかゝり、朝の三時にはもう死んでゐたといふ哀話ものこつてゐます。

マラリアは、むかしイタリヤでもひどくはやつたもので、あの強大なローマ帝国がほろびたのも一つはこの病気が多くの人を殺したからだと言はれてゐます。マラリアは蚊が媒介するのだといふことは、すでに千四百年もまへに何かの本に出てゐるとも言ひ、少くとも今から七十三年前に、早くそれを主張した医者がある

たのですが、だれもそれを信用せず、方々の流行地で  
は、ともかく、人間から人間へうつるのだといふので、  
病人の着てゐたものや、もちものをはじめ、船に患者  
が出ると積み荷をまですつかり海へなげすてたといひ  
ますから、その損害だけでも、どれだけに上つてゐる  
か計算も出来ないでせう。パナマ地方で、工夫につい  
てゐたフランス人の医者たちは、黄色熱の患者たちの  
寝台へ、虫なぞがはひ上るのをふせぐために、寝台の  
足を、一々、水を入れた金物碗わんの中へつけてゐたとい  
ひます。これではその病人の血をすつてほかの人へう  
つす蚊を、その病人のそばで飼ひふやしてゐたわけで

した。

二

このおそろしいマラリアの病原菌はアノフェレスといふ一種の蚊がつたへるのだとわかつたのは今から二十七八年まへのことで、インドの英国軍隊についてゐたロナルド・ロツスといふ軍医少佐が発見したのです。アノフェレスは、ハマダラ蚊ともよばれ、羽根に黒いまだらがたくさんあつてとまるのにも、普通の蚊がお



しりを下につけると反対に、おしりを上げてとまりますからすぐ区別が付きまゝす。この蚊のめすは、とくに長いくちばしをもつてゐます。すべて蚊は人間の血をすふのはめすだけで、をすは人間にとまつても血はすひません。

マラリアの病原菌は或ある小さな微生物にとりついて、それを寄生主にして生きてゐるもので、その寄生主がハマダラ蚊のからだの中に住んでゐるといふことを、ロツス少佐が根気づよい顕微鏡検査で見つけ出したのです。そのマラリア蚊が人間の血をすふときに、病菌がくちばしからつたはつて人間の血管の中にはいつて

どん／＼繁殖し、俗におこりといふ、一定の時間をおいては、ひどい熱の出る苦しい病気をさせます。ロツス少佐のその発見については、永い苦心談もあるのですが、それはわづらはしいのでひかへます。

ところが、ふしぎなことに、たま／＼この発見が報告されたぢきあとで、米西戦争でキューバ島べいせいに出征中のアメリカの軍医のリードといふ人が、黄色熱について、それがやはりステゴミイアといふ一種の蚊からつたはることを発見しました。その病菌が、どんな生物に寄生して蚊のからだの中にはいるのか、それは、今もつてわからないのですが、ともかくステゴミイアをさへ

避けまたは殺しつくせば、黄色熱を根絶させ得ることがわかつたのですから、それだけでも、人間の幸福の上に重大な意味をもつてゐるのはいふまでもありません。

リード氏は四五人の同僚と一しよに、病気の調査にキューバへ出張してゐたのですが、その中の一人のラチーアといふ人は、その島でなくなりました。そこでリード氏は、じぶんたちの研究をつゞけてゐる建物に、ラチーアしやうしや廠舎といふ名をつけて、死んだ同僚の記念にしてゐました。

リード氏は、ステゴミイアが黄色熱を媒介するとい

ふことを見出したとき、みいだそれをじつさいに人間について実験する必要が生じ、だれか二人、ぎせいの的にステゴミイアにさゝれて見てくれるものはないかと、ために兵士たちに相談をもちかけました。リード氏は、と言つたところでそれは、しよせん不可能なことゝおもひながら、研究上の慾望よくぼうから、なかばじようだんに言つたのですが、はからずも二人のわかい下級の兵卒が、わたし私たちが試験体になりますと勇敢に申し出ました。リード氏はよろこんで、では、あとでどつさりほうびのお金をもらつて上げるぞと勇み立ちますと、二人はそれを聞いて、急にその場を下りさがかけました。私たち

は、そんなきたない考かんがへから出立したのではありません、金などは一さいもらはない条件ならばおひきうけしますと、二人はふりかへつて言ひました。リード氏は、顔を赤らめて直立し、帽子をぬいで、

「紳士しんしたちよ、私わたしは二人にお礼をいひます。」と言つて頭を下げました。兵卒のことは、だれでも、たゞ、

「マン」と言つて「ゼントルマン」とは言はないのです。この二人の勇者のぎせいのおかげでリード氏の研究がすつかりたしかめられたのです。二人とも、そのために死んだかどうか、そこははつきりしてゐませんが、要するに、人間全たいのためには、神さまにひとしい、

りつばな救ひ手であつたと言はなければなりません。

### 三

で、お話は運河にかへりますが、アメリカ政府はフランスの技師が失敗したあと、最後に自国のゴーガスといふ大佐を総指揮者に任命し、はじめに、三万人の従業者をつのり、ついで四万人を増し、しまひには五万人もふやして、開さくにあたらせました。ゴーガス大佐は、もとく、医者出の人でしたので、今言つたロッ

ス少佐やリード氏の発見からをしへられた以上、もう、こんどは根本に工夫たちの中からマラリアや黄熱病の患者は一人も出さない計画をたてました。つまり同地方からすべての蚊を一ぴきのこさずほろぼしつくせば、いふことはないのです。

運河の工事の全線は四十八マイルですが、大佐はその両側面五マイルづつ、つまり長さ四十八マイル幅十マイルの地帯、面積にして四百八十平方マイルの地域内の、あらゆるくさつた水たまりやどぶを干しかわかし、湖水のたまり水をどんく海にはかし、流しほせない沼なぞには、どつさり石油を流しこんで蚊の発生

をふせぎにかゝりました。いふまでもなく、蚊はきたない水の中に卵をうむのです。石油を流すと、それが卵からかへつた幼虫の呼吸器の中にはいり、いきがつまつて死んでしまふわけです。

リード氏はこの大地帯の中に工夫たちのかたまつてゐる村を四十か所に作りました。そして、そのすべての家々には、窓へすつかり金網を張らせ、水のはいつてゐるものには一々ふたをさせました。それから工夫たちをはこぶ列車にもことごとく金網をはらせました。それと同時に、各村ごとに健康診断をしてまはる医者隊、こはれた窓や金網のやぶれをなほしてあるく隊、



たまり水へ石油をまく隊、水たまりを干しさらへる隊、家々へ石油をくばる隊といふふうに、何百人といふ人数をはいぞくさせて、たえ間もなくはたらかせ、列車ごとに、かならず病院車をつけなぞして、患者はすぐ隔離するといふ組織にし、一方、全従業員に一さい酒類を飲ませないことにして、健康と勤勉の率を上げ、ぐんぐん水路をほりひらかせました。

最初のフランス人ルツセは水路面を海面と同じ高さでとほす設計をしてゐたのですが、それはチャグレスなぞといふ河々の水があふれ出すのを勘定に入れなかつたからでした。ゴーガス大佐は、その河々の水を引

いて幅五百フィート、長さ七マイル、海面から八十五フィートある水路を作り、下の方へ三区劃の水門をこしらへて、船がその中へはいると、水をふやして、つぎのたかい水面へおくりこむといふ仕組みにして、たかい水路をもらくくと通過させることに成功しました。

全工事に動いてゐる機関車が五百台、浚泥機しゆんていき百台、トラック、ポンプ、エレヴェイター、起重機各五千、それでもつて、どんく谷をうづめ、山をほりくづしたもので、海へはこび出した泥どろや土や岩石は総計二十億トンと計上されてゐます。大佐はかうして十年間の

苦心のすゑに、開さくの大工事をりつぱになしとげました。これでヨーロッパの諸港から北アメリカの太平洋海岸へ来る船も、その海岸からニューヨークへいくのにも、わざ／＼南アメリカの南端をまはらないですむやうになつたので、けつきよく約四千マイルだけ航路がはぶけることになつたのです。その一ばんの功勞者のゴーガス大佐は、小さいときにお父さまになくなられ、貧しい母の手一つで、食ふや食はずのつらい目を見て成人した人でした。

底本：「日本児童文学大系 第一〇巻」ほるぷ出版

1978（昭和53）年11月30日初刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集 第六巻」文泉堂書店

1975（昭和50）年9月

初出：「赤い鳥」赤い鳥社

1928（昭和3）年10月

入力：tatsuki

校正：林 幸雄

2007年2月19日作成

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、  
校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで  
す。